

欧州複合危機

——苦悶するEU、揺れる世界

遠藤乾著 (中公新書・929円)

2017.2.26

脱が現実のものとなり、その他の国々でも離脱志向の右翼勢力が拡大するのは、当然だろう。そこへ中東の崩壊と難民の襲来という外患が迫ったのだから、EUの解体を囁く声が聞こえても不思議ではない。

しかし見方を変えれば、これだけの困難を複合的に抱えながら、EUはよくもここまで持ちこたえているといえなくもな

ければ敵対する域外国もない。

EUの粘りは奇跡のようにも見えるが、考えればそもそも、

国家の安定は程度の差はあれ、従来の国民国家においても危機を孕んでいるのが本来であった。英国はスコットランドや北

アイルランド、スペインはカタルーニャの分離独立を抑えながら統一を保ってきた。どんな国家も内部に地域共同体を抱え、

ってきた。国家の形成と維持は、長い熟成の時間を要するものなのである。

EUの歴史はまだ1世紀にも満たず、それが自分よりはるかに古い諸国家を傘下に置こうとしているわけである。これが解体しないのは、著者が密かに暗示するように、欧州文明の希有の伝統があるからだろう。

現にEU再編論のなかに中心を草創期の6カ国に限ろうという主張があつて、独仏を核とするこの同盟を「カロリング朝欧州」と呼ぶ人がいるという。EUの正当性をカール大帝に遡る歴史に求める言説であつて、冗談とはいえ事の本質をついているといえる。

いずれにせよ、EUは国家とは何かを問う壮大な社会実験の試みである。それを正面から描く本書が巻末にいたって、しだいに秀抜な国家論の観を呈してゆくのは当然といえるだろう。

EUの混迷から読む国家論

元首、軍隊を持つ欧州合衆国建国の夢は終焉した。EUの根本精神が死んだわけだが、これですでに組織の最盛期に生じていたと著者は見るのである。

それ以来、EUという国家があつて、傘下に従来の国民国家があるという二重構造が欧州の宿命となった。これほど根源的な背理があれば、ギリシャの財政破綻と叛乱が生じ、英国の離

い。ギリシャは加盟国に留まり、類似の疲弊国家にも離脱の動きはなく、英国の離脱後に他国で実施された世論調査では残留派が僅かながら増えている。

テロに怯えながらもすでに膨大な量の難民を受け入れているし、EUの規則を曲げることなく、受け入れた難民の人権を守って域内の自由な移動も認めている。外交面では、ロシアを除

統治の二重構造を潜在させているのである。私見だが、国家とは風俗習慣の共通性を基盤とし、それが生む法と制度によってさらに紐帯を強められ、この循環のもと

で歴史的に熟成された共同体である。独裁制、封建制、民主制など政治形態も国家を支えるが、国家はむしろそうした政体の変化を乗り越えて同一性を守